

小児科

1. スタッフ（平成27年4月1日現在）

			(専門)
科 長 (教 授)	山形 崇倫	神経	
副 科 長 (教 授)	小坂 仁	神経	
外来 医長 (講 師)	門田 行史	神経	
病棟 医長 (講 師)	小高 淳	腎臓	
病棟 医長 (学内講師)	横山 孝二	消化器・肝臓	
医 員 (学内教授)	森本 哲	血液・腫瘍・ 免疫	
	河野 由美	新生児	
(准 教 授)	南 孝臣	循環器	
	熊谷 秀規	消化器・肝臓	
	矢田ゆかり	新生児	
(講 師)	金井 孝裕	腎臓	
	佐藤 智幸	循環器	
(助 教)	伊東 岳峰	腎臓	
	青柳 順	腎臓	
	長嶋 雅子	神経	
	早瀬 朋美	血液・腫瘍・ 免疫	
	小島 華林	神経	
	松本 歩	神経	
	鈴木 由芽	新生児	
	俣野 美雪	新生児	
	松原 大輔	循環器	
病 院 助 教	佐藤 優子	喘息・ アレルギー	
	川原 勇太	血液	
	下澤 弘憲	新生児	
	岡 健介	循環器	
	新島 瞳	血液	
	植田 綾子	神経	
	鈴木 峻		
	古井 貞浩		
	山岸 裕和		
	今川 智之		
	田中 大輔		
シニアレジデント	7名		
後期研修	1名		

2. 診療科の特徴

当科は小児の総合診療及び多岐にわたる専門診療を担当している。総合診療部の担当する外来のほかに、神経、心臓、肝消化器、腎臓、代謝・内分泌、血液・腫瘍、膠原病、喘息・アレルギー、遺伝、新生児、心理の各専門外来があり、こども医療センター内で他科の専門外来とも連携をとって診療にあたっている。また、救急医療では地域医療機関と連携して、三次救急医療の重要な役割を果たしている。

病棟は急性期病棟、慢性期病棟、周産期センター新生児集中治療部門にわかれ、それぞれ38床、38床、36床の計112床のベッド数を有しており、必要に応じて小児集中治療室での治療も行う。子どもと家族のニーズに応じた包括的な小児医療と、幅広い分野の専門性の高い検査や治療などの高度な医療を提供している。

・関連領域専門医認定施設

日本小児科学会専門医研修施設（支援施設）
日本小児神経学会 小児神経専門医研修認定施設
日本人類遺伝学会 臨床遺伝専門医制度認定研修施設
日本てんかん学会 てんかん専門医認定研修施設
日本小児循環器学会 小児循環器専門医修練施設
日本小児血液・がん学会 小児血液・がん専門医研修施設
日本周産期・新生児医学会基幹認定施設

・認定医

日本小児科学会小児科専門医 山形 崇倫 他51名
日本小児神経学会認定小児神経科専門医
山形 崇倫 他2名
日本てんかん学会認定臨床指導医
山形 崇倫
小坂 仁
日本人類遺伝学会臨床遺伝指導医・指導責任医
山形 崇倫
日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医
野崎 靖之
日本小児循環器学会専門医 南 孝臣 他3名
日本臨床腎移植学会認定医 金井 孝裕
日本腎臓学会腎臓専門医 金井 孝裕
日本透析医学会専門医 金井 孝裕
日本消化管学会 胃腸科認定医 熊谷 秀規
日本消化管学会 胃腸科専門医 熊谷 秀規
日本小児栄養消化器肝臓学会 熊谷 秀樹
日本周産期・新生児医学会指導医
矢田ゆかり

日本周産期・新生児医学会専門医
 矢田ゆかり 他2名
 日本血液学会指導医 森本 哲
 日本血液学会専門医 森本 哲 他1名
 日本小児血液・がん学会 小児血液・がん指導医
 森本 哲
 日本小児血液・がん学会 小児血液・がん専門医
 森本 哲
 日本造血細胞移植学会認定医 森本 哲
 日本がん治療認定医機構 がん治療認定医
 中村 幸恵
 日本アレルギー学会アレルギー専門医
 佐藤 優子
 日本医師会認定産業医 南 孝臣 他4名
 PALS Provider 門田 行史 他10名
 日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法「専門」コース
 スインストラクター 矢田ゆかり 他5名

3. 診療実績・クリニカルインディケーター

とちぎ子ども医療センターの1年間の小児科総合診療部、専門診療部および入院診療実績について報告する。なお周産期母子総合医療センターのNICUについても一部併記する。

3-1. 外来診療

1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者数 3,201人
 再来患者数 38,489人
 外来患者数 41,690人
 紹介率 46.8%

2) 小児科総合診療部外来

医師：山形 崇倫(部科長・兼)、小坂 仁(副科長・兼)、森本 哲(兼)、南 孝臣(兼)、熊谷 秀規(兼)、金井 孝裕(外来医長・兼)、松本 歩(兼)、佐藤 優子(兼)、桑島 真理(兼)

診療実績：

総合診療部では、午前中の総合診療部外来と午後の急患対応を行っている。小児科専門医がそれぞれの専門診療部と兼務で診療を行っている。原則として初診は紹介受診のみとしているが、直接受診される場合も多い。発熱、咳、腹痛、頭痛、嘔吐・下痢などの急性症状に加えて、成長発達上の問題、また不登校は著明に増加している。

基礎疾患を有し、各専門外来に通院している小児の急性症状にも対応している。小児科の診療では常に総合的判断を必要とするため、総合診療部で問題を把握し、適切な初期治療、あるいは検査を実施し、必要に応じて、病棟や各専門診療部に振り分ける場合と、しばらく総合

診療部外来で診療後、地域かかりつけ医にお戻りする場合があります。全領域にわたる能力を必要とするため、ベテランの小児科専門医が担当している。2014年は、年間約10,000人が受診した。

	1月	2月	3月	4月
合計患者数	888 (905)	873 (885)	1002(1076)	780 (981)
	5月	6月	7月	8月
合計患者数	795 (994)	762 (901)	927(1133)	857(1100)
	9月	10月	11月	12月
合計患者数	764 (962)	875 (993)	806 (963)	856 (882)

合計患者数 10,185 (11,775) 人 () 内は2013年

3) 小児神経外来

医師：山形 崇倫、小坂 仁、杉江 秀夫、門田 行史、長嶋 雅子、宮内 彰彦

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
874	720	877	962	841	1004
7月	8月	9月	10月	11月	12月
1077	999	911	838	794	941

年間総受診数10,838人

主な診療対象：

複数の疾患を持つ例が多いため、主要疾患の1か月受診者数の概数を記載する。てんかん 400-500人、脳性麻痺や脳炎等による痙性麻痺 100-150人、自閉性障害、知的障害、学習障害や注意欠陥多動性障害 350-400人、先天代謝異常症 約20人、染色体異常や中枢神経形成異常 約80人、神経皮膚症候群 20-30人、筋ジストロフィー、重症筋無力症などの神経筋疾患 30-40人、白質脳症、脊髄小脳変性症などの神経変性疾患 4-5人、チック障害、吃音、頭痛等 40-50人であった。この他、人工呼吸器外来において、35人の在宅人工呼吸器患者を診療している。

4) 遺伝外来

医師：野崎 靖之、松本 歩

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
24	32	28	35	35	35
7月	8月	9月	10月	11月	12月
32	32	30	40	32	17

年間総受診数 372人

主な診療対象：

Down症候群、染色体異常症候群、Marfan症候群、Williams症候群などの先天奇形症候群。なお、染色体異常、遺伝性疾患は、神経外来に通院している患者も多い。

5) 小児循環器外来

医師：南 孝臣、片岡 功一、佐藤 智幸、
横溝 亜希子、岡 健介、白石 裕比湖、菊池 豊
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
246	279	312	329	284	333
7月	8月	9月	10月	11月	12月
338	317	326	360	314	346

年間総受診数 3,784人

主な診療対象：

先天性心疾患（心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、完全大血管転位症、Fallot 四徴症、完全大血管転位症、肺動脈閉鎖症など）の術前と術後、川崎病、不整脈、心筋症、心雑音の精査などを中心に外来診療している。

6) 小児腎臓外来

医師：金井 孝裕、伊東 岳峰、小高 淳、
齋藤 貴志、青柳 順、別井 広幸
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
184	158	175	190	191	157
7月	8月	9月	10月	11月	12月
199	213	188	205	175	151

年間総受診数 2,186人

主な診療対象：

小児特発性ステロイド感受性ネフローゼ症候群、60～70名；IgA腎症、40～50名；膜性増殖性糸球体腎炎、5名；ループス腎炎、7名；巣状糸球体硬化症、8名；膜性腎症、3～5名；Alport症候群；5名、腹膜透析；4名；その他、低形成腎、嚢胞腎、尿細管アシドーシス、慢性腎不全（腎移植後の症例を含む）などを診療している。

外来の特色：

急性血液浄化療法から、維持透析療法・生体腎移植前後の管理まで、ほぼ小児腎疾患のすべてを守備範囲としている。また、他の小児専門診療科からの依頼を受けて、血漿交換療法やG-CAPなどの体外循環療法も行っている。院外との連携では県内はもとより、群馬・埼玉・茨城・福島などからも、紹介を受けている。

7) 小児代謝・内分泌外来

医師：杉江 秀夫、横山 孝二、小熊 真紀子、
山崎 雅世
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
211	191	200	166	169	176
7月	8月	9月	10月	11月	12月
191	179	180	167	176	149

年間総受診数 2,155人

主な診療対象：

新生児マススクリーニング検査の2次精密検査、先天性代謝異常症（OTC欠損症、脂肪酸代謝異常症、糖原病、代謝性ミオパチーなど）、高コレステロール血症、糖尿病などの代謝性疾患、および成長ホルモン分泌不全性低身長、副腎過形成、甲状腺機能低下症、バセドウ病、思春期早発症などの内分泌疾患が主体である。

また下垂体近傍の腫瘍摘除、あるいは放射線治療後の内分泌障害にも対応している。

8) 小児消化器・肝臓外来

医師：桃谷 孝之、熊谷 秀規、横山 孝二
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
94	107	110	95	93	85
7月	8月	9月	10月	11月	12月
106	122	135	108	120	106

年間総受診数 1,281人

主な診療対象疾患：

炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）、腸管ペーチェット病、胃・十二指腸潰瘍、ヘリコバクターピロリ感染症、粘膜脱症候群、若年性ポリープ、機能性胃腸障害（機能性ディスペプシア、過敏性腸症候群など）、B型・C型ウイルス性肝炎（キャリア、インターフェロン療法、母子感染予防措置）、胆道閉鎖症（術後を含む）、肝内胆汁うっ滞症（Alagille症候群、症候性肝内胆管減少症、原発性硬化性胆管炎など）、肝硬変（胆道閉鎖症術後、COACH症候群など）、慢性肝炎（自己免疫性肝炎、輸血後肝炎など）、急性肝炎（CMV肝炎、EBV肝炎、TTV肝炎など）、非アルコール性脂肪肝、肥満症、代謝性肝疾患（Wilson病、NICCDなど）、体質性黄疸、胆石症、急性膵炎などの診断や内科的治療を行っている。急性虫垂炎、Hirschsprung病、メッケル憩室、肥厚性幽門狭窄症、胃食道逆流症、胆道閉鎖症などの外科的疾患、経皮的または腹腔鏡下肝生検、上部・下部消化管内視鏡および小腸内視鏡検査や内視鏡治療に関しては、麻酔科、小児外科、移植外科、消化器内科と連携を取りながら診療を行った。

9) 新生児フォローアップ・シナジス外来

医師：河野 由美、矢田 ゆかり、俣野 美雪、
鈴木 由芽、本間 洋子
診療実績：

新生児フォローアップ

1月	2月	3月	4月	5月	6月
190	170	162	172	186	169
7月	8月	9月	10月	11月	12月
186	186	163	166	169	183

年間総受診数 2,102人

シナジス外来

1月	2月	3月	4月	5月	6月
33	42	46	0	—	—
7月	8月	9月	10月	11月	12月
—	—	21	18	12	17

年間総受診数 189人

主な診療対象：

新生児フォローアップ外来は、NICU退院児を対象として、退院後2週間から小学校3年生まで長期フォローアップを行っている。診療内容は成長・発達の評価とともに合併症の治療や精査、必要な養育支援である。気管切開、在宅酸素療法や経管栄養などの在宅医療を必要とする児も多い。外科系診療科、心理面接・心理検査、リハビリテーション部門と連携して包括的な診療を行っている。新生児難聴スクリーニングの精査・フォローもしている。新生児外来の他に冬季に行われるRSV重症化予防のために別枠で設置したシナジス外来でもパリーブズマブを接種した。

10) 小児血液・腫瘍外来

医師：森本 哲、早瀬 朋美、川原 勇太、新島 瞳
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
171	134	176	161	116	133
7月	8月	9月	10月	11月	12月
191	203	159	125	139	123

年間総受診数 1,831人（血液長期フォローアップ外来を含む）

主な診療対象：

急性リンパ性白血病（ALL）や急性骨髄性白血病（AML）、若年性骨髄単球性白血病、悪性リンパ腫、慢性骨髄性白血病などの血液腫瘍疾患、神経芽細胞腫（NBoma）や腎芽腫、肝芽腫、網膜芽腫、脳腫瘍などの悪性固形腫瘍、ランゲルハンス細胞組織球症（LCH）や血球貪食性リンパ組織球症（HLH）の組織球症、血友病や特発性血小板減少性紫斑病、遺伝性血栓症などの凝固系疾患、再生不良性貧血や遺伝性球形赤血球症、サラセミアなどの赤血球系疾患、慢性良性好中球減少症や重症複合型免疫不全、慢性GVHDなどの白血球・免疫疾患。

2014年の新規腫瘍性疾患は、ALL10例、悪性リンパ腫2例、AML1例、NBoma2例、肝芽腫2例、脳腫瘍3例、線維肉腫1例、骨肉腫1例であった。

- * 患者さんとその家族のQOL向上を目指し、医師・看護師・心理士などの多職種による「小児緩和ケアチーム」のカンファランスを月2回定期に開催した。
- * 腫瘍性疾患の集学的治療のため、小児血液腫瘍チーム、小児外科、小児放射線診断部と、腫瘍カンファランスをつき1回定期に開催した。

11) 喘息・アレルギー外来

医師：熊谷 秀規、佐藤 優子
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
111	85	107	88	84	112
7月	8月	9月	10月	11月	12月
124	90	100	96	109	88

年間受診数 1,194人

主な診療対象疾患：

気管支喘息、食物アレルギー、アナフィラキシー、薬物アレルギー、アトピー性皮膚炎、消化管アレルギー、化学物質過敏症など

* 気管支喘息、乳児喘息、運動誘発喘息

中等症および重症持続型の患児が大半を占める。心疾患や神経疾患など基礎疾患をもつ児も多く、他の専門外来と連携をとり診療している。

* 食物アレルギー、アナフィラキシー、消化管アレルギー

食物アレルギー児に対して、原因食物の特定や除去食導入を行い、栄養指導や薬物療法、皮膚検査、食物負荷試験を施行している。アナフィラキシーに対する急性期の治療を行い、緊急時対応の調整、学校や園を含めた諸機関との連携、緊急時使用薬（エピペン®）導入等を行っている。

12) 小児免疫外来

医師：森本 哲、川原 勇太
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
66	68	63	72	81	77
7月	8月	9月	10月	11月	12月
67	93	61	65	61	85

年間総受診者数 859人

主な診療対象：

若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、シェーグレン症候群（SJS）、若年性皮膚筋炎（JDM）など。

2014年の主な新規症例は、JIA 8例、新生児ループス3例、Bechet症候群2例、顕微鏡的多発性血管炎1例、高IgD症候群1例、C3欠損症1例であった。

13) 胎児心エコー外来

医師：片岡 功一
診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
5	3	4	6	6	3
7月	8月	9月	10月	11月	12月
6	2	1	3	7	6

年間総受診数 52人

主な診療対象：

胎児の左心低形成症候群、三尖弁閉鎖症、両大血管右室起始症、Fallot 四徴症、完全大血管転位症、多脾症候群、心臓腫瘍、不整脈など。

その他：院内産科あるいは産科開業医から紹介された、胎児に先天性心疾患や不整脈を持つ妊婦において、胎児心エコー図検査による出生前診断を実施した。

14) 1か月健診

乳児健診は原則当院産科から退院した生後1か月児の健診を行っている。また新生児マスキングの結果を外来で家族に説明している。

()内は2013年

1月	2月	3月	4月	5月	6月
101(99)	58(65)	73(90)	83(90)	61(69)	64(67)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
90(107)	68(80)	86(75)	72(80)	64(78)	101(63)

年間総受診数 921(963)人

15) 夜間・休日診療

診療実績：夜間、休日に受診し、小児科医が診療した患者数

()内は2013年

1月	2月	3月	4月	5月	6月
361(372)	271(284)	292(343)	319(381)	349(408)	260(303)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
294(348)	223(334)	235(283)	250(312)	305(329)	432(430)

年間総数 3,591(4,127)人

16) 心理検査・心理面接

臨床心理士：星子 真美、氏家 莉沙、村上 瑠璃、田所 まり子、大槻 絵理子、大森 有美子

診療実績：

心理検査件数

*総検査数 ()内は新生児検査

1月	2月	3月	4月	5月	6月
30(8)	22(5)	37(9)	33(9)	29(16)	40(19)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
37(18)	37(11)	37(13)	32(15)	26(15)	32(16)

年間総検査件数 392人

心理面接件数

*総面接数 ()内は新規面接

1月	2月	3月	4月	5月	6月
94(8)	102(7)	85(6)	59(7)	81(3)	95(5)
7月	8月	9月	10月	11月	12月
107(7)	93(7)	91(5)	82(2)	63(2)	64(4)

年間総面接件数 1,016人

主な対象：

検査内容は、神経外来からの知能・発達検査、新生児外来からの極低出生体重児のフォローアップのための発達検査の依頼が主であった。心理面接は、身体表現性障害、不登校などの適応障害、発達障害児の二次障害への対応等の相談や、入院している患児の心理面のケアが多かった。また、患児に関わる医療スタッフや学校等地域機関との連携にも努めた。患児に対しては、言語面接、プレイセラピー、動作法、芸術療法などを用いてカウンセリングを行い、家族の相談にも併せてのっている。

3-2. 小児科入院診療

小児科は主として2A病棟と4A病棟で診療し、重症児については小児集中治療室(PICU)で集中治療を行っている。また、総合周産期母子医療センター(NICU、GCU)で新生児の診療を行っている。

1) 小児科の月別新入院患者数(総合周産期母子医療センターを除く)

1月	2月	3月	4月	5月	6月
82	85	87	73	80	91
7月	8月	9月	10月	11月	12月
93	79	65	79	91	95

総計年間入院患者数 1,000人

2) 入院患者の疾患別内訳(人数)；小児科退院患者大分類別疾病統計(ICD-10ベース)、総合周産期母子医療センターを除く)

章	章名称	ICD	件数		在院日数		平均在院日数
1	感染症及び寄生虫症	A00-B99	56	4.3%	691	2.1%	12.34
2	新生物	C00-D48	59	4.6%	4748	14.4%	80.47
3	血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害	D50-D89	26	2.0%	445	1.3%	17.12
4	内分泌、栄養及び代謝疾患	E00-E90	41	3.2%	370	1.1%	9.02
5	精神及び行動の障害	F00-F99	5	0.4%	31	0.1%	6.20
6	神経系の疾患	G00-G99	129	10.0%	2821	8.5%	21.87
7	眼及び付属器の疾患	H00-H59	3	0.2%	90	0.3%	30.00
8	耳及び乳様突起の疾患	H60-H95	2	0.2%	9	0.0%	4.50
9	循環器系の疾患	I00-I99	32	2.5%	1076	3.3%	33.63
10	呼吸器系の疾患	J00-J99	246	19.0%	3392	10.3%	13.79
11	消化器系の疾患	K00-K93	40	3.1%	938	2.8%	23.45
12	皮膚及び皮下組織の疾患	L00-L99	8	0.6%	127	0.4%	15.88
13	筋骨格系及び結合組織の疾患	M00-M99	51	3.9%	683	2.1%	13.39
14	腎尿路生殖器系の疾患	N00-N99	60	4.6%	1187	3.6%	19.78

16	周産期に発生した病態	P00-P96	279	21.6%	10063	30.4%	36.07
17	先天奇形、変形及び染色体異常	Q00-Q99	162	12.5%	5600	16.9%	34.57
18	症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの	R00-R99	74	5.7%	563	1.7%	7.61
19	損傷、中毒及びその他の外因の影響	S00-T98	20	1.5%	234	0.7%	11.70
20	傷病及び死亡の外因	V00-Y98	0	0.0%	0	0.0%	0.0
21	健康状態に影響を及ぼす要因及び保健サービスの利用	Z00-Z99	0	0.0%	0	0.0%	0.0
22	特殊目的用コード	U00-U99	0	0.0%	0	0.0%	0.0
総計			1293		33068		25.57

3) 新生児集中治療部 (NICU) の入院実績

1) 年間入院患者数

449名 (再転入4名を除く)。院内出生404名 (初診時から外来観察79名、母体搬送37名、母体外来紹介288名)、院外出生45名 (病院等からの搬送43名、自宅分娩等2名)。

2) 人工呼吸器管理数・率

126/449例、28.1%。

3) 生存率・死亡数など

出生体重 (BW) 別、在胎週数 (GA) 別入院数および死亡数を示す。

GA (W)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
22	2	1	1	50.0
23	1	1	1	100.0
24	4	2	2	50.0
25	4	4	0	100.0
26	6	5	1	83.3
27	1	1	0	100.0
28	4	4	1	100.0
29	9	8	1	88.9
30	8	8	0	100.0
31	6	6	0	100.0
32	19	18	1	94.7
33	25	25	0	100.0
34	17	17	0	100.0
35	26	25	1	96.2
36	36	35	1	97.2
37以上	281	278	3	98.9
計	449	438	11	97.6

BW (g)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
<500	3	2	1	66.7
<1000	21	18	3	85.7
<1500	27	26	1	96.3
<2000	59	59	0	100.0

<2500	86	83	3	96.5
>2500	253	250	3	98.8
計	449	438	11	97.6

4) 死亡症例内訳

在胎24週	超低出生体重児 (596g)、重症仮死、PDA、肺出血
在胎39週	重症仮死、DIC、低酸素性虚血性脳症
在胎39週	肺動脈閉鎖、右室冠動脈瘻、急性腎不全、腹膜炎
在胎26週	21トリソミー、非免疫性胎児水腫、一過性骨髄異常増殖
在胎38週	鰓弓症候群、後鼻孔閉鎖、大動脈縮窄複合、空腸閉鎖
在胎29週	超低出生体重児 (976g)、横隔膜ヘルニア、肺低形成
在胎32週	非免疫性胎児水腫、水頭症、心筋肥厚、Noonan症候群疑
在胎24週	超低出生体重児 (393g)、重症仮死、緊張性気胸
在胎36週	Zellweger症候群
在胎22週	超低出生体重児 (558g)、新生児仮死、敗血症
在胎35週	重症仮死、GBS敗血症、DIC

5) 先天性心疾患入院例

有意な血行動態異常を呈する中等症・重症例25例。PICU転科13例、NICUから退院10例、NICU内死亡2例。

6) 多胎入院数

97名 (21.6%)。

7) 外科症例数 (手術例のみ)

20例、光凝固術3例

8) 他院への搬送

9例。8例は状態安定後に搬送元等の病院に転院。1例は眼科治療目的に国立成育医療センターに転院。

3-3. 主な検査・特殊治療

1) 心臓カテーテル検査

心臓カテーテル検査の総数は123件 (カテーテル治療43件、カテーテルアブレーション3件、成人症例7例)であった。カテーテルアブレーション、成人症例は循環器内科と合同で検査、治療を行った。対象疾患は、心室中隔欠損24件、心房中隔欠損21件、ファロー四徴症9件、両大血管右室起始症7件、房室中隔欠損症7件、三尖弁閉鎖6件、左心低形成症候群 (亜型含む) 4件、純型肺動脈閉鎖3件、単心室 (機能的含む) 14件、完全大血管転位症5件、動脈管開存症4件、川崎病4件、不整脈3件、その他 (大動脈弓離断、肺動脈弁狭窄、肺高血圧症、拡張型心筋症、BWG症候群、冠動脈右室瘻、肺動静脈瘻、総肺静脈還流異常) 12件であった。カテーテル治療42件の内訳は、バルーン血管形成術14件、血管塞栓術 (コイル、AVP) 11件、心房中隔欠損閉鎖術 (ASO) 10件、動脈管閉鎖術4件 (ADD2件)、バルーン弁形成術2件、心房中隔裂開術1件であった。

2) 心臓超音波検査

スクリーニングを含め、2011件施行している。

3) 腎生検

2014年に21件施行した（開放腎生検を含む）。

4) 造血細胞移植

2014年に造血細胞移植を8回行った。内訳は、ALL 1回（非血縁臍帯血）、NBoma 1回（非血縁臍帯血）、脳腫瘍6回（自家末梢血）であった。

5) 消化器・肝臓系検査

検査実績

A) 消化管系		件数	B) 肝・胆道系		件数
上部消化管内視鏡検査		17	腹腔鏡下肝生検		1
下部消化管内視鏡検査		14	経皮肝生検		2
小腸内視鏡検査					
ダブルバルーン法		3			
カプセル内視鏡		1			
内視鏡的逆行性膵胆造影		2			

3-4. 小児科カンファレンス

毎週月曜日、火曜日、水曜日、金曜日の朝に新入院患者の紹介と討議、水曜午後の総回診で入院患者の病状報告と討議を行った。

小児科における症例検討（CC）は毎週木曜日18時からカンファレンス室で入院例を中心に検討した。以下症例検討会のテーマと担当を示す。

日時	テーマ	担当
1月30日	偽性低アルドステロン症I型を呈した両側水腎症、尿管逆流防止術後の3か月女児	齊藤（洋）、中野、長嶋
2月6日	SSPE ～当院の経験と最近の知見～	山崎、鈴木（峻）、池田
2月13日	新生児ループスー（NLE）児出産既往女性の周産期管理を考える	下澤、弘田、矢田
3月6日	ホストインについて 発熱時のけいれん対応について	石井、池田
3月13日	頻回の脱力発作を来す難治性てんかんの4歳男児	鈴木（峻）、山崎、池田
4月17日	難治性てんかんの児に、血小板減少症を合併した1例	田中、坂本、小島、石橋、青柳
5月15日	小児腹膜透析の実際	別井、青柳、齋藤（貴）
5月22日	全身リンパ節腫大と末梢性顔面神経麻痺を伴ったEBV感染の1歳男児例	小太刀、松本、鈴木、宮内
6月5日	発作性上室性頻拍への対応 ～診断と治療のポイント～	古井、安濟、岡、佐藤（智）

6月12日	サイトメガロウイルス感染を伴った難治性下痢症の1ヶ月男児例	坂本、齋藤（洋）、宮永、栗島、長嶋、横山、熊谷
6月26日	乳児有熱性尿路感染症に対するtop-down approachの報告及び今後の方針についての提案	(小児泌尿器科)川合、小林、日向、中村、中井
7月3日	日内変動のあるジストニアを呈した8歳男児例	小太刀、松本、鈴木（峻）、宮内
7月10日	2014年前半 まとめの会	
9月11日	第4病日で冠動脈瘤を認めた川崎病の1例	安濟、尾崎、松原、青柳
9月25日	心理面接、心理検査の活用について	星子
10月9日	月経を認めていたために診断に時間を要したObstructed hemivagina and ipsilateral renal anomaly (OHVIRA) 症候群の1例	横溝
10月23日	反復する急性膵炎に急性腎障害を合併した1例	今川、青柳
10月30日	重症虐待ケースについて	尾崎、松本、宮内
11月6日	Zellweger症候群の一例	安濟、下澤
11月13日	高血圧が遷延し診断に難渋しているMCTD女性例	石橋、中野、別井
12月4日	小児緩和ケアを考える	早瀬
12月18日	2014年後半 まとめの会	

4. 来年の目標・事業計画

とちぎ子ども医療センター小児科は、小児科疾患の診療のみならず、同センター内、附属病院内のあらゆる診療部門と連携し、小児の全ての疾患領域に対して臨床研究に基づく高度な医療を提供する。来年の目標として、①小児科専門診療部門各領域における小児高度医療の推進、難治性疾患の治療成績の向上、②重症児、慢性疾患児の診療や小児救急医療における地域医療機関とネットワークの構築、③小児科医育成の継続、を掲げる。